第 148 回　清とアヘン戦争

1　イギリスの使節と清の対応

・清では人口が激増したが、開発の限界から社会に不安定な状況をもたらした。
・18 世紀末、四川で起こった（　　）により清の混乱が始まった。
　→清は無力であり、地方の郷紳たちは団錬という独自の軍事組織を作った。
・清では、乾隆帝時代の 1757 年以降、外国との貿易港を（　　）１港だけに制限し、（　　）と呼ばれる商人組合だけが外国貿易を独占していた。

・ロシアとは、ネルチンスク条約とキャフタ条約に基づき国境での交易が行われた。
・またイギリスは、（　　）の進展により大量生産された製品を売るための市場が必要となっていた。
　→イギリスは、（　　）や（　　）などの使者を派遣し、貿易港の拡大や貿易制限の緩和を求めた。
　→使者が三跪九叩頭を拒否したこともあり、清はイギリスの要求を拒絶した。

マカートニーと乾隆帝の謁見

1793 年、マカートニーは三跪九叩頭を拒否したが、乾隆帝の「野蛮人だから仕方ない」という譲歩で、謁見を許された。
左の絵はヨーロッパ側の視点で書かれたもの。

アマースト

1816 年、嘉慶帝に謁見を求めたアマーストも、マカートニーと同じように三跪九叩頭を拒否した。今回は謁見すらできなかった。

ジャーディン

1833 年に東インド会社による中国貿易独占権が廃止されると、ジャーディン=マセソン商会をはじめとする多くの商社が、中国貿易に乗り出した。

2　紅茶とアヘン

・18 世紀後半以降、イギリスでは午後に紅茶を飲む習慣が広まっていた。
　→そのため清から大量の（　　）を輸入していた。
　→茶の代金である（　　）の流出が続いて、大幅な貿易赤字となっていた。

・そこでイギリスは、（　　）により（　　）を行うことで銀を回収しようとした。
　→逆に大量の銀が清から流出するようになり、清では銀不足となった。
　→地丁銀制により銀で税金を納める庶民は、非常に苦しむこととなった。

＜三角貿易以前＞　　＜三角貿易＞

アフターヌーンティー

イギリスで午後に紅茶を飲むことが大ブームとなった背景には、産業革命の進展がある。適度なカフェインと糖分は、労働者の疲労回復に役立った。

アヘン中毒者の末路

アヘンは、ケシの実からとれる麻薬である。
より依存性の強いモルヒネやヘロインの原料にもなる。

3　アヘン戦争の開始

・アヘンの流入により、銀の大量流出やアヘン中毒の拡大による混乱がひどくなると、清でもアヘンを取り締まる動きが出てきた。

道光帝
第８代皇帝。清の衰退が本格的に始まった時代である。

◆（　　）（在位 1820～1850 年）

・1839 年、欽差大臣の（　　）は、広州のアヘンを大量摘発し全て処分した。

→1840 年、イギリスのパーマストン外相は、「麻薬の密輸を妨害された」という前代未聞の理由で、（　　）を起こした。

→イギリス軍は、圧倒的な軍事力で清軍を粉砕した。

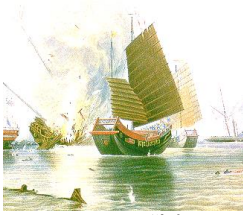
→1842 年、清とイギリスは、（　　）を締結して講和した。

林則徐

清廉潔白な人柄で、アヘン戦争敗北後に地方に飛ばされても、よい政治を行って地域の人々に慕われた。偉大な政治家である。

イギリスのパーマストン外相

ホイッグ党のパーマストン外相は、イギリスの利益のために自由主義をおしつけて植民地化をすすめる自由貿易帝国主義を進めた。これはパーマストン外交とも呼ばれる。



アヘン戦争

清は昔ながらのジャンク船でイギリス海軍に挑んだが、まったく勝負にならなかった。
また平英団という、農村の住民が組織した武装組織の抵抗もあった。

＜南京条約の内容＞

1　広州、厦門、福州、寧波、上海など、（　　）すること。

2　清は、イギリスへ（　　）すること。

3　外国貿易を独占する（　　）をすること。

4　清は、イギリスに対して没収されたアヘンなどの賠償金を支払うこと。

香港
1997 年に中国に返還された。現在では世界有数の大都市だが、中国との関係は注視する必要がある。

＜さらなる不平等条約＞

・1843 年、英と五港通商章程と（　　）を結ばされた。

・1844 年、米と（　　）、仏と（　　）を結ばされた。

1　清は、片務的な（　　）を各国に認めること。

2　外国人は罪を犯しても清の法律では裁かれず、犯罪者の国の裁判官によって裁かれること。

※（　　）を認めた

→各地に（　　）と呼ばれる外国人居留地が設置され、中国の主権が及ばない地域となった。

3　貿易の際の関税は、協定で決められたとおりにすること。

※（　　）

魏源
アヘン戦争の際に、林則徐の依頼で『海国図志』を書いた。幕末の日本人にも影響を与え、西洋に対する危機感を強めるきっかけとなった。